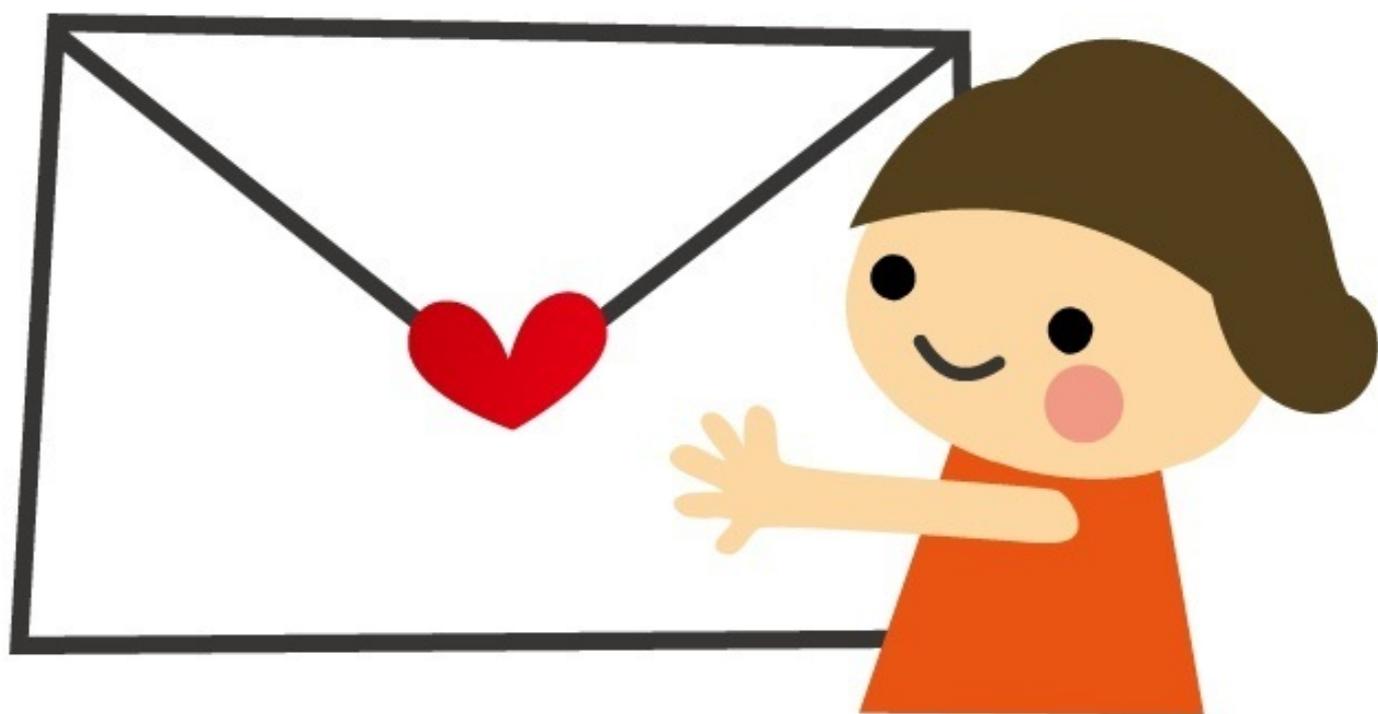


手紙が繋ぐ貴女と私の言葉



広瀬 瑞記

手紙と小説と貴女と私

本を開いたら手紙が挟まっていた。

「ここに描かれている女性に私は憧れています。とても美しい言葉で多くの女性が描写されています。

あなたがどのように感じたのか知りたいです。感想を教えてくださいね」

可愛らしい便箋に綴られた私だけに向けられた言葉に嬉しく思いながら、私はお借りした本の1ページ目を開いた。

私と彼女の出会いは教科書に載っていた太宰治の『走れメロス』だった。

その年新任で私の通う中学校にやってきた国語の先生は、まだ不慣れな授業の中で太宰治という人物についてじっくりと私たちに授業をしてくれた。

彼女の大学時代の専門が一体何なのか今では全くわからないが、私は彼女の授業を通じ「太宰治」

という人物に興味をわき、彼が残した作品を読みたいと彼女に話をした。

その翌日、彼女は一冊の小説を私に渡した。

—太宰治 『斜陽』

私が全く知らない時代の、全く想像がつかない没落貴族の話。

受け取った時には気が付かなかったが、家に帰って本を開くと可愛い便箋が挟まっていた。

私はその手紙を読み終えた後一気にこの小説を読み、彼女への手紙を書いた。

それから彼女と私は「教師と生徒」という垣根を越え「本好きな友達」となった。お互いに

好きな本を貸し借りし、その都度互いに手紙を書いた。
住所を必要としない、誰にも知られない文通仲間。

そのような関係は、彼女が異動になるまで続いた。
そして彼女が異動する春のある日、私は彼女の住所を教えてもらい本の貸し借りを抜きにした文通仲間となった。

初めは月に数度の連絡も、高校受験が近づくにつれ頻度が少なくなり、互いの連絡先を知ることが出来なくなった。

彼女が引越しをし、私も長年住み慣れた街を引越すことになったからだ。

そして、本の感想を言い合えない関係になってからかなりの年数が経過した。

私は恐らくあの頃の彼女の年齢より上となってしまったことだろう。
彼女も私が想像もつかない年齢となり、多くの経験を積んだ事だろう。

久しぶりに彼女から送られた言葉を読み返した。
そして考える。
今、あの頃読んだ本をもう一度読み返した時、彼女と同じ感想を抱く事が出来るのか？と。

だから、私は『斜陽』をもう一度読み始める。
中学の頃の自分に出逢うために。私に多大なる影響を与えた彼女と出逢うために。